

スタインベックの「ノーベル文学賞受賞演説」 ——文学と人間

上 優二

(はじめに)

ジョン・スタインベック (John Steinbeck, 1902-1968) はウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) やアーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) 等と並び、二〇世紀アメリカ文学を代表する文豪として、世界各地で様々な言語に翻訳され、多くの愛読者に親しまれ受容されてきた。とりわけ、『トーティーヤ・フラット』(*Tortilla Flat*, 1935)、『疑わしき戦い』(*In Dubious Battle*, 1936)、『ハツカネズミと人間』(*Of Mice and Men*, 1937)、『長い平野』(*The Long Valley*, 1938)、『怒りのぶどう』(*The Grapes of Wrath*, 1939)、『キャナリー・ロウ』(*Cannery Row*, 1945)、『エデンの東』(*East of Eden*, 1952)、『チャーリーとの旅—アメリカを求めて』(*Travels with Charley in Search of America*, 1962) 等の作品は人気が高く、文字媒体のみならず、その多くが映画、演劇、ミュージカル等に翻案されている。

彼の文学的評価は生前浮沈の波に洗われるが、『われらが不満の冬』(*The Winter of Our Discontent*, 1961) と『チャーリーとの旅』を契機に、『怒りのぶどう』を中心とした、それまでの作品群が再評価される。彼は一九六二年にアメリカの文豪として六番目のノーベル文学賞受賞作家としてその地位を確保することになる。

さて、作家は意識する、しないにかかわらず、その作品の中に自己の認識する人間観、世界観を織り込みながら物語世界を紡ぎ出し読者に提示するものである。当然、それぞれの物語世界には、その折々の人間観、世界観が形を変え投影されているが、

その一方で繰り返し表出される人間観、世界観もある。スタインベックの場合も例外ではない。本稿の目的は彼の「ノーベル文学賞受賞演説」(*Speech Accepting the Nobel Prize for Literature*, 1962)を中心に据え、そこに辿りつくまで一貫して彫刻される人間観、世界観を検証・考察しながら、その文学的特質を読み説くことである。

(一)

スタインベックは「ノーベル文学賞受賞演説」の中で、人類がかつて神に属していた力を手に入れることで恐るべき「選択の重荷」を背負わされていると警鐘を鳴らす。とりわけ、彼はアメリカ合衆国と旧ソビエト連邦による「原子爆弾開発」に伴う軍拡競争に危機感を募らせ警鐘を鳴らす。人間が神と比肩するほどの科学の知識と破壊力を獲得したことで、人間とその世界を破壊してしまうかもしれないと危惧したからである。その背景には、弱体化した人間精神が人間とその世界を破滅へ追いやる起爆装置となるという確信がある。こうして彼はその破滅に対する防御・安全弁の機能を果たすのもまた人間精神そのものであると宣言する。彼は「初めに言葉があった。言葉は神とともにあった。言葉は神であった」(ヨハネによる福音書・第1章1節)を援用し、「終わりに言葉がある、言葉は人間であり、言葉は人間とともにある」(269)と述べ、言葉に対する信頼と言葉のもつ力を強調しそのスピーチを結んでいる。この言説には、その文脈を辿ると、「①言葉は最終的に、あるいは根源的に人間精神の本質である、②現代文明はその言葉が弱体化することで人間精神も弱体化し危機に瀕している、③ゆえに言葉の復権以外に危機に瀕した現代文明を蘇生させる道はほかにない」という意味が込められている。すなわち、人間は言葉の力を通して精神を蘇生させる以外に道はないので、言葉の復権こそが文明の蘇生の鍵となるというものである。ここには言葉に対する不信、懐疑は強調されることはなく、むしろ「人間と言葉に対する絶大な信頼」が表明されている。また、援用の基になっている聖ヨハネの福音と比較するとき、人類の運命を決定するのは唯一絶対神の「神」ではなく、最終的に人間自身であるという人間観の表明も読み取れる。これは「人間に対する絶対的な信頼」から出発し、基本的に人間に「自由意志」を与えるという信条へとつながっていく。というのも、人間に「自由意志」を認めなければ、人間が自分の運命を

選択する能力、理性もなく、その文明の蘇生も不可能となるからである。スタインベックはとりわけ『エデンの東』において、この「自由意志」の問題を個人のレベルにおいて、「人間が善と悪の狭間にあって、基本的に選択する能力をもつ」という「自由意志」論を展開する。彼は「受賞演説」の中でも、科学の力を制御する人間の心と精神に対する信頼を表明し、「人間の完全性」(the perfectibility of man) (263)を高らかに讃歌する。

スタインベックはその上で「作家の使命が人間精神を向上させることが目的」(262)であること、さらに「人間の心と精神の偉大さを示す能力を明言し讃美すること」(262)であるとする一方で、「人間の暗くて危険な夢を白日の下にさらしながら、多くの嘆かわしい欠陥や失敗を暴くことである」(262)と言明する。ここには、人間が「弱さと絶望に対する果てしない戦い」(262)に勝利して初めて、「心と精神の偉大さを示す能力」(262)を勝ち取ることができるという彼の人間観が明示されている。こうして彼は「人間の完全性を情熱的に信頼しない作家は何の貢献もすることはないし、文学の会員になる資格もない」(263)とし、文学が「人間と人間の世界に関する知識を増大させ持続させる」(264)という先導的役割を果たすことを強調する。

彼はその晩年アメリカ社会の墮落、腐敗を目の当たりにし、しばしば危機感を抱き慨嘆しながらも、最後まで人間に対する信頼、人類の未来に対する希望を失うことはなかった。

(二)

スタインベックは豊かな自然に恵まれたカリフォルニア州サリーナス盆地に生まれ、幼少期・青少年時代を送りその人間観、世界観を形成している。いわば、サリーナスという小さな盆地に世界の縮図を読み取り、その人生哲学を生涯に渡りその物語世界に織り込んでいく。しかし、一人の人間が幼少期・青年期から壮年期・晩年にいたるまで固定した信条・思想を保ち続けるということはいえないうし、当然どの作家であれ様々な経験、出会い、思索等がその折々の人間観、世界観に影響を与えていく。

スタインベックは海洋生物学者・エドワート・F・リケッツ (Edward F. Ricketts,

1897-1948)と親交を結びその強い影響を受ける。すなわち、彼はリケッツとともに海浜の潮だまりの世界を観察し語り合う中で、その「潮だまりの世界」に宇宙の生命現象の縮図を読み取っていくのである。

彼は人間を他の生物と同じ「一個の種」に過ぎないと捉え、人間と他の生物との類似を模索することになる。この人間観はその物語世界にも反映され、人間は神が自分の姿に似せて創造した特別な存在であるとする、いわゆる伝統的なキリスト教の人間観と大きくかけ離れた視点に立ち、自然環境の中で人間中心の人間観、世界観から離脱する。

次に彼は人間と他の生物との類似を模索する中で、あらゆる生命体が生の拠り所とする自然環境が実は熾烈な生存競争の舞台でもありとし、生命体がまずは自らが「生き残ること」(Survival)をその至上命題、つまり「生命の第一法則」としてその生命体内部に刻み込まれているという認識に立つ。この認識は人間社会もまた弱肉強食の自然環境と変わらないとする「ソーシャル・ダーウィニズム」(social Darwinism)の説く人間観、世界観と結びつく。彼はまずはこの認識をその思想の土台に据え出発点とする。こうして彼の物語世界はしばしば「自然主義文学」(literary naturalism)の人間観、世界観と共振するが、この共振ぶりは、強弱濃淡はあるものの生涯に渡り散見され、処女作『黄金の杯―海賊ヘンリー・モーガンの生涯、時折史実を参照』(*Cup of Gold: A Life of Henry Morgan, Buccaneer, with Occasional Reference to History*, 1929)に始まり、『怒りのぶどう』を貫通し、最終的には『エデンの東』、『チャーリーとの旅』にまで及ぶことになる。

さてスタインベックは「生命の第一法則」が「生き残ること」(Survival)だとするならば、生命体は「生き残る」ために「集団を形成する」という性向をもつということに着目し、「集団人間」(Group-men)理論あるいは「ファランクス」論(the theory of phalanx)を展開する。

例えば、『怒りのぶどう』の物語世界では、ジム・ケイシーはスタインベックのスポークスマンとなって、個人が生き残るためには「個の連帯」、すなわち集団の形成が不可欠であると説く。その他、様々な作品において個人が集団を形成しなければ死

へと追いやられる現実を繰り返し提示し、個が集団の形成へ向かうという生命現象を描きだす。また、小集団は大集団へと果てしなく統合され、合一し、果てはラルフ・W・エマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-1882)の説く「大霊思想」(the Over-soul)に近似した人間観、世界観を展開していく。例えば、先のケイシーは、個人は宇宙の根源としての“one big soul”(24)へと結びついていくという「全体論」を主唱する。その上で、ひとつの集団が他の集団と熾烈な生存競争を演じるという生命現象も明示する。スタインベックはあるがままにその生命現象を観察し提示することに専念し、集団の論理が個人の意思を抑圧するという傾向性も見逃すことはなく、個人が集団へと埋没する様態を描き続ける。あるいは、集団の目的、維持のために個人がその尊厳を破壊され自立できず死へと追いやられるという生命現象をつぶさに描きだす。しかし後に彼は、集団が個人を抑圧するという人間の生命現象に危機感を抱き、『エデンの東』等で「集団の理念」から「個人の理念」へと大きく舵を切ることになる。

けだし、人間は「一個の種」にすぎないという人間観、世界観は、人間と他の生命体との類似性を求める比喩を散りばめる文体など、その他の分野にも決定的な影響を残している。「生命の第一・第二法則」は他の生命体とともに人間生命にも適応され、人間の「生命維持・生殖活動」という根源的な認識となり、彼の物語世界の根底を支えている。

(三)

彼の物語世界の特質を知るために、非目的論的思考(Non-teleological Thinking)という思考方法、認識論に焦点を当てる。彼はリケッツとの親交・議論のなかでこの非目的論的思考という思考方法、認識論を発展・構築しているが、ここではリケッツではなくスタインベックに焦点を当てる。その思考方法、認識論は誤解を恐れず簡潔にのべると、人間にありがちな身勝手な期待・希望・夢を排し、あるがままに現実を直視し認識しようとする客観的・科学的な立場を志向する態度である。この認識論、思考方法は彼の人間観はもちろんのこと、物語の構成、具体的には「夢の形成と破綻」というプロットにも深く関わってくることになる。しかしながら、彼は人間の夢を否

定するわけではなく、夢が生存する上で不可欠な生命の源、動機付け、あるいは緩衝装置であるという認識も併せ持つ。彼はこの夢の破綻する現実を注視し、そこから最終的には再び蘇生しようとする逞しい人間の生命讃歌を紡ぎ出し、己の物語世界に織り込んでいく。彼は非情で冷徹な現実を凝視する眼の奥に、弱者への温かい^{まなこ}励ましを発信しつづけている。

彼の物語世界にはこの「夢の破綻」というプロセスの中で、様々な死が描かれている。例えば『知られざる神に』においては、古今東西の宗教が思い描いた死後の世界を読み取り、その物語世界に織り込んでいる。換言すれば様々な死生観を抱く人間群が登場し、その世界観・死生観を披露することになる。具体的には、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教を代表とする死生観、つまり「天国・地獄の思想」から、ヒンズー教、仏教、ドイルド教等にみられる「輪廻思想」、そして「天国・地獄」の实在を否定し、「輪廻思想」も拒否する唯物論的死生観に至るまで、多様な死生観を提示し自分の色に染め上げる。ある意味で、彼は生涯にわたり「死」を凝視し、その死が反照する「生の意味」を真摯に探っていく作家であったといえることができる。そして、その物語世界に描かれる「死の形態」は便宜上、(1)「生存競争から見た死」(2)「非目的論的思考から見た死(人間の理解を超えた死)」、(3)「宇宙の根源(神)へと合一する死」という三つの形態に分類できる。すなわち、(1)の形態は、ソーシャル・ダーウィニズムに則り、人間社会を適者生存の原理が働く生存競争の舞台と捉え、弱者が強者に捕食されるという死の形態である。繰り返すが、スタインベックはまず人間社会が弱肉強食の世界であるという基本的な認識から出発している。次に(2)の形態は(1)の形態とともに自然主義文学の特質と強く共振しているが、人間の希望、理解を超えた非情な死として登場する。その死は「非目的論的思考」の立場から客観的にあるがままに、かつ人間の感情とは無関係で非情な、あるいは突然の死として描かれている。以上、(1)と(2)の形態は人間が社会の中で生を営む中で現象面として死を捉えようとするものである。これに対して、(3)の形態はその現象面として現れてきた死を受け入れて、その死に人間の理解・解釈が施されたものである。すなわち、(3)の形態は、一気に日常の世界を突き破り、理性・感性を統合する「人間

の精神」の領域へと向い、瞬く間に宇宙の根源と合一していく死として現出する。ただし、こうした3つの「死の形態」はその死生観の理解を深めるために便宜上分類したもので、奥底で互いに結びあい共振している。

作家個人は特に晩年になると人間は死後無になるという唯物論的死生観を滲ませている。この死生観は人間が死後「天国・地獄」といった別の世界に行くこともなく、この世界に生まれ変わることもなく、無となって宇宙に帰るというものである。この死生観は死後の魂の實在は認めない点が際立っている。いずれにしても、彼はその物語世界にさまざまな死を描き、その「死」の底から浮かび上がってくる「生のあり様」を何度となく読者に提示し問いかける。

スタインベックは二〇世紀アメリカ社会という環境でその生涯を送っているため、キリスト教文化の圧倒的な影響を受けている。が、その一方で彼は若い日より精神分析学者カール・ユング(Carl Jung, 1875-1961)や神話学者ジョウゼフ・キャンベル(Joseph Campbell, 1904-1987)にも影響を受けている。さらにその物語世界には西洋と東洋の文化的要素が寄木細工のように重なり合い混在し構成されていることも明らかである。すなわち、彼には世界の文化・宗教に形を変えて登場する普遍的な神を探究する姿勢も読み取れる。また、その物語世界には一九世紀アメリカルネサンス期のエマソン、ヘンリー・D・ソロー(Henry David Thoreau, 1817-1862)、ウォルト・ホイットマン(Walt Whitman, 1819-1892)等の説く超絶主義(transcendentalism)も展開されている。

端的な例を挙げると、『怒りのぶどう』においては、旧約聖書「出エジプト記」(Exodus)、また『エデンの東』では旧約聖書「創世記」(Genesis)がプロットやイメージ等に援用されキリスト教文化が前景に現われるが、先の超絶主義の「大霊」思想にも共振・共鳴している。彼は『「エデンの東」創作日誌』(*Journal of a Nobel: The East of Eden Letters*, 1969)の中で、偉大な人間の一人としてイエス・キリスト(Jesus Christ)とともに、東洋思想を代表して釈迦(Buddha)や老子(Lao Tzu)の名前を挙げている。なかでも、彼の物語世界は『キャナリー・ロウ』、『楽しい木曜日』(*Sweet Thursday*, 1954)、『真珠』(*The Pearl*, 1947)、『エデンの東』等の中で、老子の説く「無

為自然」「少欲知足」の思想と共鳴しながら、パラドキシカルな世界を現出する。彼は例えば『キャナリー・ロウ』において、欲望に捉われた物質文明から離れ自由奔放に生きるマックとその仲間達を一つの理想的な生き方として描いている。

パラドキシカルな物語世界の原点は、やはりサー・トマス・マロリー (Sir Thomas Malory, 1405-1471) の『アーサー王の死』(*Le Morte D'Arthur* CA. 1470) にある。彼は幼少の頃からこの作品に魅せられ、その物語世界がパラドックスに満ち溢れていることを読み取り、自分の文学観・人生観を形成・構築している。彼は実際、処女作『黄金の杯』から遺稿として残された『アーサー王と気高き騎士』(*The Acts of King Arthur and His Noble Knights*, 1976) にいたるまで、パラドキシカルな要素をその物語世界に織り込んでいる。

スタインベックは様々な作品において「善と悪」「光と闇」「個人と集団」「強者と弱者」「勝者と敗者」「夢と現実」「荒野と文明」「運命 (決定論) と自由意志」等々、一見すると対立する概念の併置する、いわば二項対立の物語世界を提示する。しかし、その物語世界を検証していくと、そこには二項対立がいつしか揺らぎパラドキシカルな世界が展開されていることに気づかされる。端的な例として『エデンの東』の物語世界では、まずは善と悪を対峙する形で提示された後に、実は善の中に悪が、悪の善が存在し、そのため善と悪との境界が曖昧となり、こちらが善で、こちらは悪であると断定できなくなってくる。つまり、善と悪との二項対立の世界観は崩れ、あらゆる人間は善と悪の両面を抱えているというポストモダンな人間観、世界観が読者に伝えられる。しかも万人はあらゆる方向に変化する可能性を秘めているという人間観が全面に押し出され、その結果、自分の運命は自己選択の結果であるとされる。これは究極的には人間の「自由意志」の表明となり、自分の人生は「自己責任」であると解釈される。『エデンの東』にはこの「自由意志」が与えられていない人物も登場するが、人間には「自由意志」が与えられているので、その人生は自己責任で選び取るものだというメインテーマが強調されている。こうして冒頭の「ノーベル文学賞受賞演説」で言及された「人間に対する信頼」へと繋がっていく。興味深い点は、個人が善を選択するにあたり、自己の「内部に潜む悪の存在」を認識し、そこから生まれてくる「罪の意識」に焼き焦がされて初めて、「善への選択」が可能となるという人間観へ

帰着している点である。この点、「善への選択」には自己に内在する「悪の存在」を認識しなくてはならないというパラドキシカルな人間観が浮かび上がってくる。

(おわりに)

スタインベックは冒頭の「ノーベル文学賞受賞演説」の中で、「文学 (書き言葉) はスピーチ (話し言葉) と同じくらい古い」(261) と述べ、文学 (書き言葉) が古来、スピーチ (話し言葉) と同じく人間の必要性から生まれ出たものであることを確認する。彼は原子爆弾の発明とその投下を念頭に置き、人類がこのまま精神文明を置き忘れ、科学技術を頂点とした物質文明へと傾斜していくならば、人類は間違いなく滅亡するという現実認識を抱いている。そして彼は科学技術の暴走の歯止め・安全弁となるのが「人間精神」であり「人間の心」であると主張する (269)。その上で、「作家の使命が人間精神を向上させることが目的」(262) であること、さらに「人間の心と精神の偉大さを示す能力を明言し讃美すること」(262) であるとする。しかしその一方で、作家の使命は「人間の暗くて危険な夢を白日の下にさらしながら、多くの嘆かわしい欠陥や失敗を暴くことである」(262) とも言明する。ここには、人間が「弱さと絶望に対する果てしない戦い」(262) に勝利して初めて、「心と精神の偉大さを示す能力」(262) を勝ち取ることができるという人間観の再認識がある。こうして彼は「人間の完全性を情熱的に信頼しない作家は何の貢献もすることはないし、文学の会員になる資格もない」(263) とし、文学が「人間と人間の世界に関する知識を増大させ持続させる」(264) という先導的役割を果たすことを強調する。人間は言葉を用いてものを考え、言葉によって根源的な認識にたどりつくからだ。スタインベックはこうした意味を込めて、「ノーベル文学賞受賞演説」を「終わりに言葉がある、言葉は人間であり、言葉は人間とともにある」(269) と締めくくった。

Works Cited

- Steinbeck, John. *Cup of Gold: A Life of Henry Morgan, Buccaneer, with Occasional Reference to History*. New York: Robert M. MacBride, 1929.
—. *East of Eden*. New York: Viking, 1952.
—. *The Grapes of Wrath*. New York: Viking, 1939.

—. *Nobel Prize Acceptance Speech. The Portable Steinbeck*. Ed. Pascal Covici, Jr. New York: Viking, 1979.